

けた者が当たった。裁かれると気持ちのよいものでないので、みななぶれたふりをしていた。同胞であっても油断を許せなかった。

こうして私どもは三年間の地下作業を終わった。大部分の者は帰国したが、私は一部の者とイルクーツクのラーゲルへ転属した。全然知らない人たちとの生活がまた始まった。今度は昼間の作業、主として道路の舗装であった。危険もなく、太陽も見られ生きたような気持ちであった。食事も以前よりよくなり、一年は過ぎ帰国の日が来た。三百人くらい他へ転属した。この人たちは元警察、憲兵であったと聞いた。

イルクーツクを後にナホトカへ一週間を要したろうか。ナホトカには輸送船を待つ大勢の同胞がいた。ソ連の労働歌を歌ったり、出港する者に赤旗を振って送る者、さながらお祭である。ここに長くどどまる者、ここまで来てまた帰された者もあると聞く。私は一週間くらいで昭和二十四年八月二十九日に乗船することができた。船中いろいろの出来事があったと聞くが、我々の船中は極めて平穩であった。九月一日上陸、舞鶴港で検疫

を済ませ、無事復員することができた。文面に限りがあり十分な表現ができないが、概要を申し上げます。

### 寒さ、飢えなど四重苦にあえぐ

島根県 足立 秋男

「あれ？あの山はどこかで見えたんだ。ここは一体どこだろう？」私は穴のあくほど山を見詰めた。

昭和二十年九月中旬、満州間島省の省都・延吉街を出発して連日の行軍。八日目ごろ、この山の下砂利道を進んでいた。降伏した日本軍は、延吉でソ連側の要求により一千人単位の作業隊を次々に編成した。作業隊は戦争で壊れた橋や道路を修理しながら北鮮へ進み、北鮮から船で日本へ帰す——というのがソ連側の口上。実際には行軍一点張りで作業は全然なく、琿春街を通過した後も隊列は南東の北鮮へ向かわず、進路を北東へ取っていた。

山の下を通過して約五時間後、やっと思い出した。私

は間島省東部の国境守備隊に配属され、ソ連軍の山の陣地を毎日見ていたことに気づいた。「あの山はソ連軍の山だ。今は反対の北側から見ているのでわからなかったんだ」と納得した。その途端「ここはソ連領だ。北鮮ではない。ソ連はおれたちを帰国させるのではなく、シベリアへ連行して働かせるのではないか」と想像した。予感悪い方の中し、やがて貨車にぎゅうぎゅう詰めで乗せられ、数日後、ハバロフスク南方のホールで下車し、ラーゲルに入った。

作業隊主力は間もなくエンジンに移動し、私の属する中隊だけがホールに残留、先着の小川大隊に編入された。(大隊長の小川様には帰国までお世話になりました。)ホールには製材工場と発電所があり、数日後早くも製材工場へ働きに出された。

シベリアで最も苦勞したことは寒さ、飢え(食料の質、量とも最低)、重労働、言葉の四重苦。冬は零下四十度台まで下がり、生きていくのがやっとという感じ。川の流水はもちろん凍結するが、今でも覚えているのは四月の初め、川の真ん中へ連れて行かれ、二十メートル間

隔で川底まで氷に穴を掘らされたこと。水深一・五メートルくらいだったが、川底の十センチや十五センチは水が流れていると思ったのに、底までカチンカチンの氷詰め。ロシア人の監督に「あと一か月もすれば氷が解けるのに、なぜ穴を掘るのか」と聞いたたら「お前は頭が悪いなあー」ときた。結局、解氷期の直前にソ連軍工兵隊がこの穴に爆薬をしかけて氷を爆破し小さくしないと、大きな氷塊がすぐ下流の木橋の橋脚に当たり、一発で橋がぶっ壊れてしまうという話だった。

毎日の労働もきつかったが、冬は川が凍って原木を川から揚げるのができず、貨車積みで製材工場の引込線に入ってくるのをロープだけで下ろす作業が一番きつ、危険度も高かった。直径一メートル以上はざらという巨木下ろしには心身ともにクタクタ。日曜日に貨車が入ると原木下ろしに狩り出されるが、代休制はなく、一カ月ぶっ通しで働かされたこともあった。

言葉にも苦勞した。なにしろシベリア行きの前に私が知っていたロシア語はペーチカ、トーチカのたった二つだけ。毎日、ロシア人監督から労働の指示を受けるが、

双方とも手真似足真似一〇〇%。その場で意思が通じなければならず、文字を覚えるヒマなど全くない。仕方なく、そのロシア語に最も近い日本語を決めてテレビの連想ゲームみたいな覚え方をした。

穴を掘るの「掘る」は「カバイ」だから「掘るはカッパライ」と覚える。口の中でカッパライを二、三度繰り返しているうちにカバイが出てくるという具合。

上曜日の「スポータ」は「酢豚」。歯の「ズーベ」は「不良女」と覚える。昔、不良女をズベ公と呼んだからだ。

しかし、近い日本語のないものもある。例えば日曜日の「ワスクレセーニエ」。仕方なく「日曜日は忘れた」と覚え、ワスレターを口中で唱えているうちにワスクレセーニエを引き出す。この方法で二百ぐらいの単語を覚え、半年たったら怪しげな発音でもある程度通じるようになった。

食料もひどかった。忘れられないのはキュウリだけの昼食。コルホーズ（集団農場）へキュウリの収穫作業に行ったとき、昼食は？と聞いたら「目の前にある」との答え。キュウリをいくらでも食べよということだ。腹へ

コだから、最初の三本は一気に平げるが、岩塩と水だけでは、さすがに食が進まない。

抑留の二年三か月間、雑穀、黒パン、スープだけ。米の飯と味噌汁は一回も食べていない。昭和二十二年十一月、ナホトカから復員船に乗り、船内での初の昼食に少量とはいえ米飯と味噌汁が出されたとき「米はこんな色が白かったのか。味噌汁はこんな色だったのか」と、懐しさに身体がふるえて感激、思わず涙と鼻水をご飯の中へ落とした。周りの人もみんな泣いていた。

地球の果てとも言える異郷へ不法に連行され、毎日が死と隣り合わせ。四重苦にあえぎながら動物並み、時には動物以下の生活を強制され、人生のどん底を生き抜いたシベリア抑留は、私の生涯にとって忘れられぬ思い出だ。末筆ながら、シベリアで死亡した人、帰国後死亡した人のご冥福を祈ります。